

学会ニュース

目次

- ・「モーツァルト・イヤー」に《皇帝ティートの慈悲》を
松田 聡……………1
- ・中川久定、ヨヘン・シュローバハ編『18 世紀における他者のイメージ アジアの側から、
そしてヨーロッパの側から』刊行のお知らせ
増田真……………3
- ・事務局より……………5

「モーツァルト・イヤー」に《皇帝ティートの慈悲》を

松田 聡

今年になってすでに、モーツァルトのオペラ《皇帝ティートの慈悲》の新録音全曲盤 CD が 3 点も発売されている。それらの制作が、すべて生誕 250 周年にちなんでのことなのかどうかは定かでないが、「モーツァルト・イヤー」を大きく特色づける現象の 1 つであることには間違いない。そのなかの 1 点の批評を、さる音楽雑誌から依頼され、これまでに出版された主な CD もかき集めて繰り返し聴くうちに、私は、《ティート》がすっかり好きになってしまった。同時に、作品の「再評価」の問題をめぐって、いろいろと考えさせられもした。

モーツァルトの記念の年に関わる原稿を、この「学会ニュース」のために書くよう求められたのは、ちょうどそういうときであった。もともと、話題を多く持つほうではない。テーマはやはり、このオペラに定めるほかあるまい。しかも《皇帝ティートの慈悲》は、見なおしが著しいとはいえ、モーツァルトの後期のオペラの中では、いまだ存在感の最も薄い作品でもある。せつかく CD の種類も増えて、さまざまな名演奏を享受できるようになったのだから（これについては最後に触れよう）、このオペラにも、より多くの関心が寄せられるようになってほしい。そのような想いもある。そこで、ここ 1 ヶ月ほどの間に考えたことを、まとまらないながらも、ごく簡単に綴ってみることとした。

まず若干の作品解説を。オペラの初演は、作曲者の死に約 3 ヶ月先立つ 1791 年 9 月 6 日に、プラハの国立劇場でなされた。神聖ローマ帝国の新しい皇帝レオポルト 2 世がボヘミア王として戴冠する日の祝賀上演である。この祝典オペラを制作する契約を、興行師グアルダゾーニは上演予定日のわずか 2 ヶ月前に、ボヘミアの統治団と結んだ。彼は、はじめウィーンの宮廷楽長サリエリに作曲を依頼したが、多忙を理由に断られ、次にモーツァルトを選んだのであった。台本は当初の契約どおり、メタスタージョが 1734 年に執筆した『皇帝ティートの慈悲』に決まり、ザクセンの宮廷詩人マツォラによる新たな改編版に、モーツァルトは作曲していった。その作業は、7 月末ごろに開始されたものと考えられている。

オペラの物語は、古代ローマの皇帝ティートの治世が舞台である。先帝の娘ヴィテッリアはティートの后となることを切望しているが、皇帝は、親友セストの妹セルヴィーリアを結婚相手に選ぶ。しかし、すでに愛する人がいることを彼女に打ち明けられ、ティートはその考えを諦める。そして代わりにヴィテッリアを選ぶのだが、彼女はそれを知らぬま

ま、怒りにかられて愛人であるセストにティートの暗殺をけしかけ、凶行はなされる（以上第1幕）。ところが、犠牲になったのは別人であった。セストは捕らえられる。皇帝は、真相を語ろうとしない親友の態度に苦悩するが、それでも彼を赦す決意をする。一方、ヴィテッリアは、セストが自分をかばい続けていることを知って、彼の愛の強さに打たれ、自らの罪をティートに告白する。皇帝は再度驚愕するが、結局はすべてを赦す（以上、第2幕）。

さて、このモーツァルト最後のオペラは（初演は《魔笛》のほうに後になったが、その作曲は《ティート》に先んじて実質的に完了していた）、これまで、きわめて評判が悪かった。とにかく、古い台本に基づいたオペラ・セリアであることも、作曲の期間が短いことも、皇帝ティートが寛大すぎることも、すべてが低い評価の原因となっていた。現在はおそらく、それほどは極端でもないのだろうが、何しろ「一般的な評価」なるものを見定めるのは、（そのようなものがあるとしても）簡単なことではない。ただ、いずれにせよ、いわゆる「4大オペラ」にこれを加えて「5大オペラ」としよう、という動きが出ていないのは、たしかである。モーツァルトの最後の5つのオペラのうち、これだけが仲間外れなのである。結局のところ《ティート》は、「4大オペラ」に準じる作品、というのにとどまるのだろうか。

われわれは、例えば《フィガロの結婚》の独創的な側面を高く評価し、そのような作品の創作とモーツァルトの個性とを強く結びつけようとする。これは、相対化すれば、近代的な芸術概念に基づくアプローチといえようが、実は《フィガロ》の初演されたブルク劇場のオペラ公演も、それを支持するようなあり方をしてきた。その公演におけるオペラは、原則的に特定の機会と結びついておらず、その限りでは自律的なものとして上演され、新作が多く発表される中で、聴衆の支持を受けたレパートリーのみが生き残っていったのである。そしてモーツァルトも、他人とは異なる自らの才能を強くアピールする必要を、明らかに自覚していた。ここには、近代的な音楽家の姿が明確に見出されよう。

しかし、戴冠式のためのオペラを担当するとなると、求められるものは大きく異なる。ここには競争相手がいるわけではない。大事なものは、新しさや独自性よりむしろ、まさしく、戴冠式という一回的で特別な機会に対するふさわしさであろう。《皇帝ティートの慈悲》には、《フィガロの結婚》とは異なるアプローチの仕方があるはずである。18世紀の後半という、時代の変わり目に生きた音楽家やその作品を理解するためには、いわば複眼的なまなざしを持たなくてはならない。《ティート》は、《フィガロ》の延長上ではなく、あくまでも戴冠式のためのオペラ・セリアとして評価しなくてはならない。それを方法論的に自覚的に行うのは、おそらく、これからの課題であろう。

もっとも、そのような評価の必要を強く思ったのは、理屈以前に、第2幕のヴィテッリアの名アリア〈花の美しいかすがいを編もうと〉を聴いて、《皇帝ティートの慈悲》というオペラ特有の美質に気づいたからでもあった。

ヴィテッリアは、自分に対するセストの愛の強さを知り、伴奏つきレチタティーヴォで、彼の犠牲のうえに自らの望みが適おうとしていることを自省し、すべてを皇帝に告白する心境にいたる。そして、オーケストラの前奏に導かれて、アリアを歌いだす…

その開始は、きわめて印象深い。《フィガロの結婚》ならば、第4幕フィナーレで伯爵が夫人に赦しを請う、あの場面にも匹敵しよう。だが、音楽のあり方は大きく異なる。《ティート》の、バセット・ホルンのオブリガートを伴うこのアリアは、ヴィテッリアの一番の聴かせどころともなっているのである。いやむしろ、初演でヴィテッリアを演じたソプラノ歌手マルケッティ＝ファントツィと、バセット・ホルンを吹いたクラリネット奏者シュタードラーの聴かせどころ、というべきであろうか。

興行師ゲルダゾーニは、この祝典オペラの上演のために、イタリアからソプラノ歌手とカストラート歌手を1名ずつ連れてきた。そのソプラノがファントツィ夫人であり、カストラートのベディーニがセストを歌った。物語の実質的な主人公はヴィテッリアとセストの2人と見るべきだろうが、オペラは音楽的にも、明らかにゲスト歌手たちを中心に構成されている。ティートも含め、他の人物たちの歌うアリアが比較的短いのに対し、2

人の歌手の4つのアリアは、いずれも、緩急2部分に分かれる「ロンド」という種類の、大規模なものである。それらがドラマの要所に配されており、最後に〈花の美しい……〉が歌われる。

ドラマを終結にもたらずヒロインの諦念を切実に描きつつ、ゲスト歌手の歌唱とウィーンのクラリネットの名手の演奏を堪能させる。特別舞台ならではの要請に充分に応えながら、それが的確にドラマの表現と結びついている。そして、ここにすべてが収斂するよう、作品全体が、音楽的に調和の取れたまとまりをなしている。その仕上げの見事さを実感し、《皇帝ティートの慈悲》の正当な評価の必要を、強く思ったのである。

実際のところ、戴冠式オペラの作曲という仕事に、モーツァルトがどのような思いを抱いていたのかは知る由もない。たしかなのは、彼が、文字通り身を削ってその仕事に取り組んだことである。ハードワークは、早すぎる死と無関係ではあるまい。その仕事とその成果とをモーツァルトの努力に報いるかたちで理解したい。私は今、そういう気持ちに駆られている。《皇帝ティートの慈悲》を取りあげることによって、生誕250年の年に、作曲家の人生を、むしろ終わりから見ているわけなのだが、それはそれで「モーツァルト・イヤー」にふさわしくないこともない、と置いていただければ幸いである。

その記念の年に、なぜ、このオペラのCDが相次いで発売されたのかまでは、ここでは踏み込むことができない。いずれにせよ、1990年代の Hogwood や ガーディナー、アーノンクールの、今ではもはや古典的ともいふべき名盤に加え、さらに個性的な演奏を楽しむようになったのは、喜ばしいかぎりである。

新盤3点であるが、ヤーコプスは、フライブルク・バロック管弦楽団を振って、バロック声楽のスペシャリストならではの意欲的な解釈を打ち出している。テンポの設定等、賛否両論はあろうが、新鮮な驚きを随所に覚えさせてくれる演奏であるのは確かである（ただし、海外盤のみ）。それと対照的なのが、スタインバーグの指揮、ミュンヘン放送管弦楽団の演奏による演奏会形式の上演のライヴ盤であり、モダン楽器の演奏解釈は穏当ながら、何より、カサロヴァ（セスト）とジャンス（ヴィテッリア）という人気歌手の、期待どおりの好演が印象的である。老巨匠マッケラスがスコットランド室内管弦楽団を振ったCDは、ちょうどそれらの中間に位置づけられようが、さすがに聴き応えのある演奏となっている。

中川久定、ヨヘン・シュローバハ編『18世紀における他者のイメージ アジアの側から、そしてヨーロッパの側から』刊行のお知らせ

増田真

今年3月、上記の書物が河合文化教育研究所から刊行された（x+370 p.、6800円）。これは18世紀における東西間の異文化接触や異文化のイメージをテーマとした2つのシンポジウムの講演録である。1つ目は1997年11月に名古屋で開催されたもので、2つ目は1998年9月、国際18世紀学会執行委員会の際に京都で開催された。京都でのシンポについては、執行委員会の開催と合わせて、2年度にわたり10万円ずつ、計20万円の助成を日本18世紀学会からいただいたので、この場を借りて報告するとともに、会員の皆さんに感謝の意を表したい。（会計報告は、去る6月の広島大会の際に幹事会と総会で行った。）

本書は2部からなり、それぞれ上記の2つのシンポに対応し、第1部には13編、第2部には11編の論文が収められている。内容は、方法論の問題などの一般的な問題から特定の作家や思想家における異文化のイメージという個別的問題まで、多岐にわたっている。モンテスキューや『百科全書』、あるいは『両インド史』など、この問題に関する古典に関する論考は当然含まれているが、それ以外にも、科学史、美術史、造園術などに関連した研究が見られる。参考のため、収録されている論文の著者と題名を以下に列挙しておく。

第I部 18世紀世界のなかのヨーロッパ、中国および日本

1. ジャック・プルースト 18世紀におけるヨーロッパと極東の間の文化の伝達者について - 方法の問題-
2. ヨヘン・シュローバハ ヴォルテールから得られる教訓 - 18世紀研究の真の普遍性に向けて-
3. ミシェル・ドロネ 東洋的残酷さについて
4. 中川久定 日本の鎖国を前にしたケンペル、フランスの哲学者たち、およびカント - 18世紀ヨーロッパ思想における「摂理」と「商業の精神」-
5. 張芝聯 現象としての「啓蒙」 - 比較論的試論-
6. 孟華 開かれた精神あるいは他者性の活かし方 - 21世紀に向けて（18世紀研究における比較論的アプローチ考）-
7. 高強 造園術と18世紀中国- ヨーロッパ間の文化交流
8. 堀池信夫 中国文化西洋起源説と西洋文化中国起源説 - フィギュアリストと清朝の学者たち-
9. 日野龍夫 鎖国体制と文学
10. 朝尾直弘 18世紀日本の身分的中間層
11. 井田清子 江戸知識人の世界認識 - 太田南畝の場合-
12. 寺田元一 山片蟠桃における「封建」、「大知」ならびに社会の創発
13. 井田進也 中江兆民の仏学塾における『エミール』教育の実践

第II部 文明の拡散と受容 東方への眼差し、東方からの眼差し

1. セルゲイ・カルプ 『両インド史』の18世紀ロシアにおける翻訳 - 『中国人についての政治的考察』を例として-
2. ハンス＝ユルゲン・リューゼブリンク 批評家と歴史家としての翻訳者 - 『両インド史』ドイツ語翻訳における中国と日本の表象について-
3. ヨヘン・シュローバハ 18世紀のフランスとドイツの百科事典類における日本のイメージ
4. マリアン・スクシペク 複数の顔を持つ孔子 - 啓蒙の時代にヨーロッパにおいて-
5. ウタ・ヤンセンス 西洋の鏡としての東洋
6. ミハエラ・ムドゥレ イエナチツァ・ヴァカレスク - あるルーマニア人の見た東洋-
7. トマス・アンフェールト リンネの旅行者たち - カール・ペーター・ツンベルクと日本-
8. サイモン・デイヴィス アイルランドの劇作家アーサー・マーフィーと『中国の孤児』
9. ライア・ザイモーヴァ 東洋と西洋の間に位置するブルガリア人 - 啓蒙の歴史叙述の観点-
10. 中川久定 土井有隣の屏風絵について - モデルを求めて-
11. トート・イシュトヴァーン・ジェルジ 18世紀東欧より見た東アジア

最後に、著者または訳者として協力をいただいた方々にもお礼を申し上げたい。なお、本書の欧文版（英語、仏語）は2007年春にフランスのシャンピオン社から刊行される予定である。

事務局より

第12回国際会議モンペリエ大会について

モンペリエ大会の通知が届きましたので、本学会 HP に掲載いたしました。
また、参加費の補助に関する連絡もご参照ください。毎回国際大会の開催に併せ、
日本18世紀学会よりマッチングファンドとして10万円を国際学会に拠出しております
が、それはこのような形で活用されております。
なお、英語版の大会通知を同封いたしましたので、ご参照ください。

国際若手セミナーについて

来年度も国際若手セミナー（旧東西セミナー）が開かれます。来年度は第12回国際
会議モンペリエ大会に併せ、その一週間前に開かれます。今回の大会の主題は
The Body and its Images : Health, Humours, Illnesses / Le Corps et ses images :sante, humeurs,
maladies です。詳細はHPをご覧ください。
積極的なご応募をお願いいたします。なお、締切は2007年12月15日です。

年会費納入について

年会費は1年度ごとに5,000円です。2005年度会費未納の方は、2006年度分と併せてご
納入をお願いいたします。

〈郵便振替〉00190-4-721734 日本18世紀学会

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会
以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりま
すので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学
会ホームページからダウンロードできますので、よろしくをお願いいたします。

幹事会メンバー：青木孝夫、安藤隆穂、安西信一（常任幹事・年報担当）、井田尚（常任幹
事）、伊東貴之（常任幹事）、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事）、金沢美知子
（常任幹事）、川島慶子、木村三郎（常任幹事）、小穴晶子（常任幹事）、高橋博巳（東ア
ジア交流担当）、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一（東アジア交流担当）、馬場朗（常任幹
事）、堀田誠三、増田真、森村敏己（常任幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第52号 2006年9月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室
e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp
fax: 03-5841-8958
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/